

野守の鏡

飛火の野守

奈良駅（JRまたは近鉄）から少し歩くと春日大社・興福寺のある春日野に着く。その一部、飛火野は古代に烽火台を置いたとの伝えがあり、かつてシルク・ロード博覧会の敷地となった。

「古今集」に「春日野に飛火の野守出でて見よ……」と歌われているのと、「新古今集」の「はし鷹の野守の鏡得てしがな……」とを組み合わせて、謡曲「野守」が構想された（一）。

旅僧が飛火野を通りかかって野守と出逢い、「野守の鏡」の由来を語られる。これは雨後に野中に残る水溜まりであり、野守の姿や空にあるものの形を映す、と説いて野守は塚の中に消える。

僧が更に鏡の奇特を見ようと法力を尽くして祈ると、やがて野守が鬼神の正体を現して立ち出で、白銀色に輝く鏡を携えて「八面玲瓏に上下四方、有頂天と地獄の有様を現

岸 井 貫

（昭二十二年理甲）

す浄玻璃の鏡」のいわれを語りながら、鏡を掲げて舞う。

天を映し地を照らし、或いは見込み或いは鑑み見る。終に鬼神は大地をかつぱと踏み破って奈落の底へ姿を消す。

戦前に「玻璃」がガラスを意味した時代を経験した者にとって、「浄玻璃の鏡」はガラス鏡の美称のように感じられる。また昔の鏡ということでは神社の御神体になっている金属製の鏡を連想することもあり得よう。能舞台上では金属のように見える円盤形のものを持って演じている。ガラスの古代を調べているうちに、「浄玻璃の鏡」にガラス鏡を充てることに疑問を感じるようになった。

ガラスは四千年以上の歴史を持つ材料であり、日本でも伝来したのは二千年前、弥生時代である。しかしガラス鏡が現われるのは江戸時代後半であるから、それより古い謡曲に取り入れられる筈はない。語感からは金属鏡とも思えない。古代の鏡は青銅鏡であり、表面を砥粉と柘榴の実（酸性液の給源）で磨き、錫アマルガムで表面処理して反

射率を上げた(二)。能で使う鏡や神社の鏡はこのイメージに近い。博物館に展示された古鏡の反射面側を覗き込むと、部分的にこの輝きが見えることがある。

浄玻璃の鏡

「浄玻璃」が仏典に由来するということを読んで幾つかの仏教語辞典(三)を調べた。中国語圏では現在も「玻璃」がガラスを指す。古代インドのペーリ語の「パリカ」、サンスクリット語の「スパテイカ」の漢字による音写。他に「頗梨・頗黎・婆利」など。水晶(水精とも)・石英を指し、七宝(金・銀・瑠璃・瑪瑙……)の一つ。またガラスの古名。あるいは明治以後ガラスを指す、とも。特に「浄玻璃」は水晶、または亡者の生前の善悪業を映す鏡、業鏡とも言う。用例は「野守」「明恵遺訓」。

このような結果から、野守の文脈の中での浄玻璃の意味を理解できた。これは水鏡や青銅鏡から連想され理想化された性能の良い鏡を指したものである。仏画十王図(南北朝時代、土佐派の画工達による。奈良市の大和文華館、京都の二尊院および浄福寺各蔵)に描かれた例では、大鬼がその身長ほどもある直径の円鏡の前へ小手を縛められた裸の亡者を引き据え、鏡の中には波立つ海の小舟に乗る鎧武者が人を突き落とされている幻像が沈むという構図であり、これを閻魔王が怒りの表情を浮かべて監督している。鏡面の白さが印象的である。

世阿弥が梅雨上がりの飛火野に出て「野守の鏡」を覗き込み、鏡像に地獄を眺めるような幻想・連想を走らせたということがなかったらうか。

琥珀とガラス

調べの中で幾つか興味ある知見を得た。一つは日本語の「ガラス」と関連する。古代ゲルマン語にはバルト海沿岸に産出する琥珀(現代ドイツ語ではベルンシュタイン。「燃える石」の意)を表わす *berstein* があり、英・独語の *berst*、*berst* の語源だという。古代印欧(インド・ヨーロッパ)系の「琥珀」は相互に対応しない(ギリシャ語エレクトロン、ラテン語スキヌムなど)ので、そもそも一つの「印欧祖語」が昔に存在し、これからそれぞれ放散した「印欧系語」という概念が成立すると仮定して良いものかどうかが議論されている(四)。

琥珀と *berst* との関連はドイツ語辞書(五)にも記された。ゲルマン人たちがローマ人が持って来たガラス玉などを見て、同じアクセサリ用途に使われる「琥珀」を充当した。逆にラテン語には *berstein* Ⅱ琥珀(および類似綴りの語)が借用語として入った。なお現代英語の琥珀(アンバー)はアラビア語からの借用語。「エレクトロン」は摩擦電気が起き易いことから技術用語「電気」の語源。

もう一つは、スパテイカの語源を更に遡ると印欧祖語に辿り着き、ギリシャ語・ラテン語のものと同じ系統に属す

ると記した例(六)である。仏教典へのヨーロッパ語の影響の解り易い例としては「鬪伽」agua(ラテン語水)が良く知られている。西紀元年を挟む時代に、仏教がインド北西部(現パキスタン、アフガニスタン領)ガンダーラ地域に西遷し、ここで教義を体系化した。この地域はアレキサンダー大王の東征(前三二七頃)以来ヘレニズム文化と接しており、仏像もここでギリシャ彫刻の影響を受けながら成立した。ローマ帝国は国力の最盛期であったし、シルク・ロードも開けて東西の交易が盛んであった。ローマの領域で作られたいわゆるローマン・グラスが隣のアフガニスタンに大量に運ばれたことも知られる(七)。仏典へのラテン語の取り入れにはこのような背景があった。

ギリシャとローマの「玻璃」

残念ながら現代の辞書(八)の範囲では「玻璃」のギリシャ・ラテン両語との同源説は確認できなかった。

ギリシャ語でガラスは「ヒュアロス」。原義はオリエント地域のアラバスター(雪花石膏と訳す。良質美麗な大理石)。これはヘロドトスがエチオピアのミイラ保管容器用結晶質石材として記したが、ガラスに充てたのはプラトンである。現代ともなればヒュアロスに透明な石、クリスタル(結晶、水晶か)、集熱レンズ、ガラスの意味を記す辞書がある。また「イアリ」(Isari)「ガラス」はごく最近語彙にはいっただけなく、会話教本に見られ、大型辞書には却っ

て見つからない。音と綴りとはヒュアロスにもガラスにも類似した点がある。

ラテン語では「ウイトウルム」。「見える、透明」と同源。キケロ、セネカ、プリニウスの著作に用例あり。別にギリシャ語からの借用「ヒュアルス」もある。

従って両語の間でも語源が違うので、祖語の一つの言葉がギリシャ、ラテン、サンسكريット、パーリ四語に分かれたとは言えない。むしろギリシャ語が東漸して仏典に取り込まれたことの方が確率が高そうに思える。

「ヒュアロス」はまだガラスの透明度が悪い時代に、「ウイトウルム」は透明度が上がった時代にそれぞれ意味と言葉が定着したように見える。

プラトンには「ガラス」が一か所ある。「土の粒子と水の粒子とからなる物に火の粒子が動く……合成体を溶けて流れるようにさせる……ガラスだとか「可融解性」と呼ばれている種類の石は……こうしたもの……」(九)。

プラトン時代のギリシャにガラスがあったのか? ミケネ時代(前一三世紀)にあったし、前五世紀にもエジプトから容易に入手できよう(ただし文献上の証拠が不思議なくらい少ない(一〇)。ルーブル美術館蔵のギリシャの青銅彫刻「勝利の競技者の頭部(前五世紀末、イタリアのベネベント沖出土)」は元来は目にガラスの象眼をしていたという。キリスト教関係の方の御教示によると、聖書の旧訳には

「玻璃」が数個所あつたが、新共同訳ではギリシャ語・ラテン語原典の言葉から由来するエメラルド、サファイアに換えられた(一一)。そのうちの一個所はヒヤシンス石(音写は「風信子石」。現代語ではジルコン)に対応するようである。

「エルサレムの門はサファイアとエメラルドで、あなたの城壁は寶石で建てられるであろう」(トビト書)。

「その天蓋には深紅の布と金とエメラルドと寶石がちりばめてあつた(ユデイト書)」。

ヒヤシンス石と「ヒュアロス」の語頭の綴りが合致していることが、かつての訳語の選択に影響しなかつたかどうか。

日本語の「ピデオ」はワイトウラムの流れである。ジュリアス・シーザーのガリア遠征での戦勝報告「来たり、見たり、勝てり」の第二句もそうである。

プリニウスの「自然博物誌」はガラスに詳しく言及した古典として良く知られているし、琥珀についても記している。セネカは「自然の探究」の中で、「小さく不鮮明な文字でも、水を入れた球形ガラス容器を通して見ると大きく明瞭に見える」と記した(一二)。透明なガラス素材と丸く吹き上げた器形を特徴とするローマン・グラスを端的に言い表わしていると感じずる。

「瑠璃」と玻璃

ガラス工芸技法史の立場からは、これらとは別に、中国

の文献に現われる「流離、琉璃」がガラスを指し、「ヒュアロス」と関連するという考察がある(一三)。日本では琉璃へ「瑠璃」を流用したか、あるいは材質の面でガラスと瑠璃(ラピス・ラズリ。濃青色の貴石)とを混同したように見えることが多い。東大寺正倉院御物のガラス器がしばしば「白瑠璃碗、紺瑠璃唾壺」のように記される。

古代には材質を厳密に区別せず、翻訳時にも意味と音との双方で混同・誤訳が起きて、現在からは解りにくくなっているであろう。日本の「瑠璃も玻璃も照らせば光る」という諺は、この事情を良く反映している。

青銅工房

奈良から近鉄線で南へ行くと石見駅がある。ここから東へ歩くと国道二十四号へ出て、その東側沿いに唐古遺跡がある。遺跡は国道建設の土取りに際して見出された(一四a)。

弥生時代の農耕集落が初瀬川の流砂に埋もれ、後世まで水田・用水池の下にあつて保存された。この条件のため木製の農具・日用品が良く残り、弥生時代が水田農耕の社会であることと、農耕技術の内容とが初めて知られた。出土した陶器片に絵模様が多く、最近では楼閣・船の絵が新しく見出されて問題を投げかけた。

唐古池は現在は国道面から二、三メートル位と見える高い堤で囲まれた皿型の用水池である。一部に水門を持って

いるし、見えない所に近代的な灌漑装置を持っていることであろう。発掘当時の写真は、この堤を背景にしての作業を記録している(一五)。

遺跡からは砂岩製および粘土製の銅鑄造用鑄型が発見された。他の遺跡の石製鑄型に比べて一見技術的に劣るように見えるが、深い凹凸の紋様を持つ大型の製品の鑄造に適し、熱伝導率が石より低くて青銅融液の型まわりと紋様の鑄上がりが良い独創的な工夫だとの評価がある(一六)。

ここの工房と、近くの鏡作神社やそれに関連した大型青銅鏡の製作との関連が論じられた(後出)。

玻璃鏡の社

鏡作坐天照御魂(かがみつくり)にいますあまてらすのみたま)神社、略して鏡作神社は唐古から国道を暫く歩いて西に入ると着く。境内の説明では高天原で神々が天照大神を岩屋から呼び出そうと試みた折に、大神の姿を映した八咫の鏡と天の日矛などの祭具を作った石凝姥命を始め三柱の神を奉祀する。祭神の名は石鑄型の中の青銅の凝固を連想させる。古墳時代・律令時代を通じて青銅祭具の製作に励んだ鏡作部の始祖説話が、日本神話が成立した時期に織り込まれたのであろうか。

鏡作神社は御神体として神(仙人。道教の伝説的人物)と獸(竜、虎。想像上の動物)を一方の面に鑄出した鏡を保管している。この外側に模様帯と縁とを補充して大型の青

銅鏡(三角縁神獸鏡。後出)を作ったといえる考えがあるし、唐古の技術が後代に引き継がれ、工人達は鏡作部に吸収されたとの想定もある(一七a)。粘土製の鑄型を使う技術が原型からの型取りに適していて、中国鏡に劣らぬ出来映えの鏡が作られたのか。

近づいた御田植祭の準備に小学校高学年くらいの女生徒の一人が引率されて来た。造花を幾つかずつ飾った笠を被り藍染に赤い色をアクセントにした着物を着た田植えの盛装であった。踊りの練習を眺めているうちに、手前に立つ石垣の柱に奉獻者の名が幾つも刻まれているのに気づいた。板ガラス製造の三社、板硝子協会、鏡とガラスに関係した幾つかの工業会と工業会長などであった。鏡作神社がガラスの神として崇敬されていた。

中国鏡の謎とロマン

JRで奈良から北に行くと、もう一つの鏡の古跡がある。奈良線上伯耆棚倉間の鉄道工事に際して三十面を超える「三角縁神獸鏡」が掘り出されて、古墳であることが判明した(樺井大塚山古墳)。

鏡の名は縁の形と背面の紋様から付けられたもので、大型・円形の青銅鏡である。古墳から日本全体で四〇〇面近く出土した。一つの鑄型で鑄られた複数の鏡群が多いのが特徴で、出土分布の状況と配布当時の政治環境との関係に議論が多い。華北の魏王朝が卑弥呼に授けた鏡であると考

えたうえで、邪馬台国近畿説の裏付けともされた。付近にもその旨の解説があった。

鏡製作の場所と経緯については、魏王朝で特鑄して卑弥呼に与えた、華南の呉で魏への貢獻品として作られた、呉の工人が日本へ渡来して鑄た、と説が分かれる。製造技法の面では、石鑄型を使った、原型鏡から粘土で型取りして鑄型を作った、一次型で鐵原型を作り土鑄型を型取りしたなどの推測をする余地がある(一七b)。

戦後の中国で鏡と鏡工房の発掘・発見が進み、関連した知見は増えて来たが、結論はかえって出しにくいという難しい状況である。日本での論争も特に近年盛んになった。中国鏡であるかないかを含めて、歴史上・技術上の謎は解けない。

鑄銅・鑄ガラス技術

青銅とガラスの製品と製造技術は、共に弥生時代に大陸から朝鮮を経て北部九州へ伝来した。この地域で多くの鑄銅用鑄型が発見されるが、ガラス勾玉用粘土鑄型も幾つか知られる。勾玉用鑄型は製鉄遺物とともに出土した例がある(春日市赤井手)が、畿内では茨木市東奈良で銅鐸用石鑄型とガラス勾玉用鑄型とが見出された(一四b)。

古墳時代に差し掛かると、丸い窪みを多数持つガラス小玉用鑄型の発見例が多く出て、古墳にガラス小玉が副葬されるのが普通のことになる。

東奈良の鐸・玉用二種の鑄型は、現地の市立文化財資料館に展示されている。鐸鑄型が大型で数も多いのに驚かされる。これらと唐古の鐸用鑄型、赤井手の玉用鑄型の模製品が大阪府立弥生文化博物館に並べて展示され、見較べると興味深い。

鏡の今

東京と京都の国立博物館、京大文学部博物館がそれぞれ多くの三角縁鏡を展示している。椿井大塚山の鏡は京大博が保管している。中国製と説明されている。

古墳のコレクション中に三角縁鏡が含まれる例は五島美術館(東京)、天理大学付属参考館、泉屋博古館(京都)、辰馬考古資料館(西宮)など。実物と模製品とを国・県・出土地のレベルでそれぞれ分けて展示することも多い。山城郷土資料館(京都)は大塚山遺品の模製品と木津周辺の鑄銅鏡工房遺物とを展示している。

鏡用青銅合金(スベキユラム)は近代まで天体望遠鏡用大型鏡材に使われた。現代では熱膨張の小さい材料を求めて、パイレックス・ガラス→極低膨張ガラスULETMと遷って来た。宇宙環境で働く天文衛星には可視光用・赤外線用・X線用に拘らずULETMは欠かせないし、平成四年に起工された「すばる8m望遠鏡(ハワイに設置)」にもこれが採用された。

最近では金属鏡はレーザー光学系用の特殊な光学素子と

しての利用が拡がった。反射する光の波長域の問題、機械加工で非球面が作れることなどかその要因であろう。

古代中国では鏡は単なる化粧道具であったというが、日本では神秘的で呪術性があるものとして扱われ、大型のものを入手する努力が払われた。水鏡しか知らなかった時代に人の姿を高い反射率で映す鏡を見た時の驚き、また太陽光を強く反射する性質がそうさせたものか。さらにそれは中国の文明や王朝の権力と連携していることの証しとして、ついで太陽神の象徴として、弥生から古墳時代にわたる日本での王権の成立を助けても来た。

弥生時代以来、青銅とガラスは製品・製造技術の両面で関連を持って来た。古代世界ではガラスは瑠璃・水晶・アラバスターなどと外見と言葉の上での混同は生じながらも、それぞれ珍重されて来たように見える。

引用文献

- (一) 「野守」 作者は世阿弥元清（一四四三頃没）。一説に金春禅鳳。 観世流大成版 検書店による。
- (二) 藤野明「銅の文化史」一九八頁、新潮選書（一九九二）。
- (三) 「日本仏教語辞典」平凡社、「総合仏教語辞典」法蔵館、「仏教語大辞典」東京書籍。
- (四) 風間喜代三「印欧語の故郷を探る」九二頁、岩波新書（一九九三）。

(五) 「DUDEN独語大辞典」。

(六) 「日本大百科全書」 小学館。

(七) 杉山二郎「西アジア古代ガラス管見」(「オリエントのガラス」町田市立博物館、平成二年)。

(八) 「リドル・スコット希英中辞典」「オックスフォード、ラテン語辞書」。

(九) テイマイオス編「プラトン全集」 岩波書店（一九八七）。

(一〇) ハーデン「ガラス・釉薬」(シンガー他編「技術の歴史」2巻 三二二頁、クラレンドン社、一九五六)。

(一一) 日本ルーテル神学校(三鷹) 徳善教授の私信。

(一二) 鶴田匡夫「統・光の鉛筆」一〇六頁に引用。新技術コミュニケーションズ（一九八八）

(一三) 由水常雄「ガラスの道」四四頁、徳間書店(昭四九)。

(一四) 「日本の遺跡発掘物語4 弥生時代」社会思想社（一九八四）。 a 藤崎省三「唐古遺跡」一〇九頁、b 樋口幸雄「東奈良遺跡」三三三頁。

(一五) 京大文学部博物館所見。

(一六) 森浩一他、座談会 「邪馬台国を求めて——検証吉野ヶ里遺跡」『東京新聞』平成二年三月頃連載。

(一七) 近藤喬一「三角縁神獸鏡」東京大学出版会（一九八八） a 二九頁、森浩一教授の見解として引用している。 b 九四頁。